

Title	泉鏡花『春昼』『春昼後刻』考 : その<風景>と 「霞」をめぐって
Author(s)	西尾,元伸
Citation	語文. 2007, 89, p. 35-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69095
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

泉鏡花『春昼』『春昼後刻』考

――その〈風景〉と「霞」をめぐって――

西 尾 元 伸

こ。 であらわれたものとして、最高峰の作品のひとつに数えられてき高い評価が与えられ、鏡花作品の中でも、幻想的な側面が傑出しある。その中で本作品は、反近代性と現実を超越した世界観とに様々なアプローチによって、多くの論考が試みられてきた作品で様々なアプローチによって、多くの論考が試みられてきた作品でまでにも、地誌的な考察、語り、先行の作品との関わりなど、までにも、地誌的な考察、語り、先行の作品との関わりなど、

では、本論はあえて作品内にあらわれる現実の〈風景〉に注目がが、本論はあえて作品内にあらわれる現実の〈風景〉と散策子の感が必場のある海がそこに存在することの意味を問いたいと考方と変化について分析する。そして、その〈風景〉と散策子の感えている。そのため、まずは散策子の〈風景〉を見る視線のありえている。そのため、まずは散策子の〈風景〉と散策子の感えている。そのため、まずは散策子の〈風景〉と散策子の感がとがるものと考える。

一.境界の向こう側を見る視線

「はあ、私けえ。」「お爺さん、お爺さん。」

かつた所為であらう。(中略)と、一言で直ぐ応じたのも、四辺が静かで他には誰も居な

けるのぢやなかつたかも知れぬ。 此方も此方で、恁く立処に返答されると思つたら、声を懸

とそれでも事は済んだのである。(一)方へ倒れたら爺を呼ばう、逗子の方へ寝たら黙つて置かう、びに、近頃買求めた安直な杖を、真直に路に立てて、鎌倉のなので。本来なら此の散策子が、其のぶら/~歩行の手すさなので。本来なら此の散策子が、其のぶら/~歩行の手すさなので。本来なら此の散策子が、其のぶら/~歩行の手すさなので。本来なら此の散策子が、其のぶら/~歩行の手すさいで、

『春昼』冒頭部である。この岩殿寺へ向かう散策子の「ぶら

の喧噪をのがれて散策する。停車場開業の祭りが開催された一日〈〜歩行」から『春昼』の世界ははじまる。散策子は停車場周辺

のことであった。

と「山」とは、この後、明らかに対比的なものとして散策子の前室から山側へと散策する途中のことである。しかし、この「海」散策子が農夫に出会ったのは、逗留中の停車場近くの海側の自

にあらわれてくることになる。

るのである。
いを構える。このような二つの地域が隣接した場所に散策子はいには、山側の村人たちが「青鬼赤鬼」と呼ぶ「異人」が多く住ま山は「昔ながら」に残された土地である。その新しく開けた地域駅周辺は「海水浴」場を中心として新たに開けた土地であり、

ある。(1|)

此の路を後へ取つて返して、今蛇に逢つたといふ、其二階家り)と言われるような風貌をしていることに無自覚ではない。

の角を曲ると、左の方に背の高い麦畠が、なぞへに低くなつ

人、赤異人と呼んで色を鬼のやうに称ふるくらゐ、こんな風あたり、雲もない空に歴々と眺めらるゝ、西洋館さへ、青異て、一面に颯と拡がる、浅緑に美しい白波が薄りと靡く渚の

散策子が(帽子被り)の自身を西洋館の「青異人、赤異人」との男は髯がなくても(帽子被り)と言ふと聞く。(二)

地の人間と自認しながら、海・山、両方の地域の違いを意識してな側面を持ち合わせている。つまり、散策子は自らを海側の新開同列に認識しているように、彼は周囲からやや浮いてしまうよう

そのためか、散策子は、村人たちが「海」にではなく「山」の見ていた訳である。

方向にばかり目を向けると感じるらしい。

- て、ちらほらと畑打つて居るであらう。(三)奥まで迎ひに来ぬ内は、いつまでも村人は、むかう向になつしばらくの間に九十九折ある山の峽を、一ツづゝ湾にして、・・あの、西南一帯の海の潮が、浮世の波に白帆を乗せて、此
- 房の胸にも、海の波は映らぬらしい。(三)・一梭を投げた娘の目も、山の方へ瞳が通ひ、足蹈みをした女

のであろう。このような感じ方は、散策子の視線がまぎれもなく、る女たちが「海」を見ないで「山」へばかり目を向けると感じた散策子が「海」を意識しているからこそ、村人や、機織りをす

中で異質な存在であることは歴然としている。散策子は〈帽子被側の地域へと歩みを進めるとき、散策子もまた周囲の〈風景〉の

そして、その中にあって、

新開の海側の地域から村人たちの山

散策子のそうした視線を考えれば、冒頭部に出会った農夫に対色合いを見てとるというのは、そうした認識による過程であった。している。散策子が山へ向かうとき目にする〈風景〉に土俗的な山側の地域を自らのいる海側と別物と見る視線であったことを示

「はあ、青大将かね。」

する次のような描写も理解できる。

との出会いであったと考えることができるのである。散策子にとっては、農夫と出会い会話を交わすことは異質な世界この農夫の様子は明らかに「蛇」のイメージを負っているが、に染むかと笑ひかけた。(二)

の風景描写の基本構造である。 以上が、散策子の視線によって描き出される『春昼』冒頭から

ない旧道を歩き続けている。そしてその地図にも載らないようなは、僧・宗朝は、〈近代〉を象徴する参謀本部編纂の地図に載らける、いわゆる〈山中異界〉への接近とくらべてみたい。ここでるとも言えよう。たとえば、『高野聖』(明治三十三年二月)におだが、この構造は、鏡花作品においては、やや特殊な位置にあ

何処までも。から岩の上へ出た、樹の中を潜つて草深い径を何処までも、なて、聞かつしやい、私はそれから桧の裏を抜けた、岩の下さて、聞かつしやい、私はそれから桧の裏を抜けた、岩の下

場所で、出来事は展開する。

すると何時の間にか今上つた山は過ぎて又一ツ山が近いて

も載らない山の中へと向かっていくのと、大きく異なるのは明ら鉄道さえ通る場所を舞台としている。『高野聖』の宗朝が地図に『春昼』は、「昔ながら」の山と新たに開けていく海とが隣接し、より最つと幅の広い、なだらかな一筋道。(『高野聖』、六)来た、この辺暫くの間は野が広々として、先刻通つた本街道

もよい。 治四十一年一月)冒頭の海、これを『春昼』の海と比較してみて あるいは、同じように逗子の海辺を舞台とした『草迷宮』(明 かであろう。

三浦の大崩壊を、魔所だと云ふ。

此の辺では此処が多い。(『草迷宮』、一)戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、人死のあるのは、獣の如く、洋へ躍込んだ、一方は長者園の浜で、逗子から森葉山一帯の海岸を屛風で劃つた、桜山の裾が、見も馴れぬ

たのどかな海としてあらわれている。そのような要素を抱えつつも、ひとまずは海水浴のために開かれ近いイメージを持っていると言えよう。だが、『春昼』の海辺は見えるというのは、『春昼』の「大鷲の翼打襲ねたる趣して」にとを提示してはじまる。たしかに、海に迫った山が「獣の如く」すぐにわかるように『草迷宮』は、そこが「魔所」だというこすぐにわかるように『草迷宮』は、そこが「魔所」だというこ

に入って来よう。 漱石『こゝろ』(大正三年四月二十日―八月十一日)などが視野本のような新開の海水浴場での光景ということになれば、夏目

生を見付出したのは、先生が一人の西洋人を伴れてゐたからし、それ程私の頭が放漫であつたにも拘はらず、私がすぐ先遊る幾多の黒い頭が動いてゐた。(中略)それ程浜辺が混雑遊る幾多の黒い頭が動いてゐた。(中略)それ程浜辺が混雑がら上がつて来た。二人の間には目をおいる強力を強いであった。私は其時反対に濡れた私が其掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いで

あったはずである。のような外国人のいる海水浴場は、〈近代〉を象徴するもので『春昼』の海辺には、「異人」のための西洋館がある訳だが、こである。(「先生と私」、`_´)

姿は『春昼』の散策子と重なって見えはしないだろうか。――二月)は、自然の中を「散歩」する人物の姿を描くが、その映したものであろう。国木田独歩『武蔵野』(明治三十一年一月へと「ぶら~~」と歩いて向かう。その行動はいかにも時代を反放策がはそのような新たに開かれた海側から「昔ながら」の山散策子はそのような新たに開かれた海側から「昔ながら」の山

がある。(五) がまる。(五) がまる。() かまる。() かまる。) かまる。() かまる。() かまる。() かまる。() かまる。) かまる

れるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖若者であつたら、帽を取て慇懃に問ひ玉へ。鷹揚に教えて呉だらう。若し少女であつたら近づいて小声できゝ玉へ。若しあげて尋ねて見玉へ、驚て此方を向き、大声で教えて呉れる。農夫にきゝ玉へ。農夫が四十以上の人であつたら、大声を・若し君、何かの必要で道を尋ねたく思はゞ、畑の真中に居・・ 若し君、何かの必要で道を尋ねたく思はゞ、畑の真中に居・・ おいまにない。

ら~~」と「散歩」し、農夫に出会う。自然の〈風景〉を発見しかし、そこにある自然の外から来た人物がステッキを持って「ぶ鏡花が『武蔵野』を意識していたかどうかは定かではない。し分達をも。(宀) 分達をも。(宀)

であるから。(五)

二.視線の反転――角兵衛獅子を起点に――

るとさえ思えるのである。

ていく。その姿をまるで真似たかのように、散策子は行動してい

ふのを見た、浜辺の藍色の西洋館の傍なる、砂山の上に顕れるて半時ばかりの後、散策子の姿は、一人、彼処から鳩の舞のとき、散策子の見る〈風景〉にはある変化がある。そらった散策子は、結末ちかく、もう一度海辺へと戻ってくる。そさて、岩殿寺で住職から客人の話を聞かされ、玉脇みをにも出

に足の続くわけはない。

に足の続くわけはない。

に、と云ふのをしほに、未だ我侭が言ひ足りず、話相手の欲て、と云ふのをしほに、未だ我侭が言ひ足りず、話相手の欲で、ぐツたりと先づ足を投げて腰を卸す。どれ、貴女のためず、だが、大名と、浪打際までも行かないで、太く草臥れた状

(三十五) (三十五)

れ難さに注目しておきたい。 お難さに注目しておきたい。 というのであるから鬼の姿でも想起されているのだろうか、嫌悪感をともであるから鬼の姿でも想起されているのだろうか、嫌悪感をともなって受け入れがたいものとなって見えているのである。この変なって受け入れがたいものとなって見えているのである。この変なって受け入れがたいものとなって見えているのである。この変なって受け入れがたいものとなって見えているのである。この変れ難さに注目しておきたい。

なかったという点にも注目が必要である。け)を託した角兵衛獅子の少年が溺れようと、それを嘆く人はいそして次にあげるように、そこにある海に、みをが(ことづ

浪はのたりと打つ。

「馬鹿な奴だ。」(ハヤ二三人駈けて来たが、いづれも高声の大笑ひ、

「馬鹿野郎。」

ポクく〜と来た巡査に、散策子が、縋りつくやうにして、

一言いふと、

「角兵衛が、はゝゝ、然うぢやさうで。」(三十五)

極口一葉『わかれ道』(明治二十九年一月)の吉三は、かつて りしても不思議でならない、(中略) 生れると直さま橋の であったことを述懐しつつ、自らをどこの「乞食の 手」かもしれないと卑下する。 であったことを述懐しつつ、自らをどこの「乞食の が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れは 当が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れは 当が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらっか、己れは がの貸赤子に出されたのだなど、別輩の奴等が悪口をいふが、 では、かつて

表を通る襤褸を下げた

母親も父親も乞食かも知れない、

以が矢張己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跣跋片眼奴が矢張己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跣跋片眼奴が矢張己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跣跋片眼奴が矢張己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跣跋片眼

なものがあるもんか(同)」と答える場面を想起させる。(三十四)」と訊ねられた角兵衛獅子の少年が、「角兵衛に、そんこれは、『春昼後刻』において、みをから「母さんはないの

ばまます。 賞いに「本所辺から来る十歳ばかりになる角兵衛獅子の子(同)」 二十三日)にも、「麺麭の皮と一銭銅貨(『硝子戸の中』、四)」を また、夏目漱石『硝子戸の中』(大正四年一月十三日──二月

が登場する。

こに居るのである。まう。巡査もまた、新開の海側の地域の性格を示す存在としてそらかである。だから、巡査でさえも、少年の死を笑いとばしてしらかである。だから、巡査でさえも、少年の死を笑いとばしてして角兵衛獅子があったことは明

これを見れば、『春昼』『春昼後刻』が先行論の多くが指摘してつけられる現実と、散策子の感情との齟齬は顕著になる。付く散策子の対比によって、再び海側へ帰ってきた散策子につきがたいと感じることや、角兵衛獅子の死を笑いとばす巡査と縋りこのように、結末ちかく散策子が停車場周辺の光景を受け入れ

. 解できる。問題は、散策子の変化であろう。 きたように〈近代〉への強い反発に貫かれた作品であることは理

そのことを考えるにあたって重要なのは、『武蔵野』に見られ

「大な馬の顔がむくむくと湧いて出た(同)」ように感じる。そし輝いて通(三)」るのを見て「悚然と(同)」し、雑樹の中から然の〈風景〉の中を「歩行」きながら、「赤楝蛇が、菜種の中をと「散策」に出掛けたはずである。だが、散策子は同じような自散策子は、まさに新開の地域にふさわしい風貌をし、自然の中へたような人物たちの行動と、散策子の行動との間の相違である。

て「立窘(同)」むのである。

れた形になる。馬の面とへ線を引くと、細長い三角形の只中へ、封じ篭めら曲角の青大将と、此傍なる菜の花の中の赤棟蛇と、向うの咄嗟の間、散策子は杖をついて立窘んだ。

奇怪なる地妖でないか。(三)

時点での散策子は自らをおびやかすものの存在に気づいたに過ぎ気づいた点が、他の「散策」とは異なるのである。もちろんこのとは裏腹の、散策子をおびやかすものに満ちている。そのことにて来たにもかかわらず、「山」の〈風景〉は、春の日ののどかさて来たにもかかわらず、「山」の〈風景〉は、春の日ののどかさでき間化した」、「この「奇怪なる地妖」の形象こそ物語の成り性を空間化した」、「この「奇怪なる地妖」の形象こそ物語の成り性を空間化した」、「山妖」を感じ取ってしまう。

線に変化をもたらすきっかけになったのである。 ない。だが、そのことは散策子が新開の海辺の〈風景〉 を見る視

散策子の感覚と〈風景〉

牛頭馬頭で、逢魔時の浪打際へ引立ててでも行くやうに思はれた ぢやね。(十五)」、「迷うた人の事なれば、浅黄の帯に緋の扱帯が、 題、「あやかりたい人ですね。よくそんなのを見つけましたね。 とまで言えるような様相を呈する原因は、まさに散策子自身の問 という点を指した言葉だったのであろう。それが、「同人異形」 な方で (九)」のように言っている。東京から来た当世風の人物 注目点になる。住職は、散策子に向かって「貴下がたのやうな御 がなされているように、その「同人異形」的な側面がひとまずは かされる。散策子と客人については、「散策子もまた死んだ男と の毒な、嘸お気味が悪からうと思ふものはありますまいに。迷ひ く。「迷ひと申すはおそろしい、情ないものでござる。(十四)」、 (九)」、「ぢや、私が見ても恋煩ひをしさうですね (同)」、という よくそんな、こがれ死をするほどの婦人が見つかりましたね 仁の御宿をいたしたことがありまする(六)」、「丁ど貴下のやう 同人異形的な存在であったことは容易に想像できる」という指摘 「蛇が、つかはしめぢやと申すのを聞いて、弁財天を、噫、お気 ような客人に共感するかのような言葉を発していく点にある。 住職は、客人をみをに魅せられて死に至った男として語ってい 岩殿寺で散策子は、昨夏の客人の死についての話を住職から聞

のでありませう(十六)」と、客人の「迷ひ」を繰り返すのであ

子の世界をつなぐものとして、「笛太鼓の囃子の音」がある」と 了され、我を失い、死に近づく危険性は遠いものではなくなる。 うて居さうな婦人(同)」などと、男を魅了し、死に追いやらず 申す風情。(十六)」、「慕はせるより、懐しがらせるより、一目見 いう指摘もある。「笛太鼓の囃子の音」がそれらをつなぐもので んだのだとすれば、客人に共感する散策子にとっても、みをに魅 にはおかない女として語るのである。 た男を魅する、力広大。少からず、地獄、極楽、娑婆も身に附絡 一寸障つても、情の露は男の骨を溶解かさずと言ふことなし、と この二人の「同人異形」性に関わっては、「客人の物語と散策 そして、一方でみをについては、「帯の結目、 住職が言うように、客人がみをに魅せられた「迷ひ」の結果死 袂の端、 何処へ

る。 降り出しそうな天気に気づく。そして「靄」は、そこにあらわれ 散策子は住職に客人が上って行った石段を指されたとき、雨の

もまた、二人の関わりを示すものであろう。

あるとすれば、それとともにあらわれた「靍」のかかる

〈風景〉

ふ、来がけに二度まで見た。 で、雲が被つて、空気が湿つた所為か、 降らうも知れぬ。日向へ蛇が出て居る時は、 笛太鼓の囃子の音 雨を持つとい

が山一ツ越えた彼方と思ふあたりに、

41

蛙が喞くやうに、遠い

た来た。靄で蝋管の出来た蓄音機の如く、且つ逢に響く。が、手に取るばかり、然も沈んでうつゝの音楽のやうに聞え

するのは、この後のことである。 (二十一)」として言及える、笛も吹く、ワアといふ人声がする。 (二十一)」として言及に唯、谷か、それとも浜辺かは、判然せぬが、底一面に靄がかゝは唯、谷か、それとも浜辺かは、判然せぬが、底一面に靄がかゝは唯、谷か、それとも浜辺かは、判然せぬが、底一面に靄がかゝがものは、この後のことである。

境界であり、入口でもあった。散策子は、その境界を感じ取って「囃子の音」が客人を他界へ誘う音だったとすれば、「靄」はそのの音」を山の向こうに聞いていることが明らかになるからである。言ったことも見逃せない。散策子が「まるで方角」の違う「囃子ますな。あれ、あれとは、まるで方角は違ひます。(十九)」とまた、住職が停車場の祭りの囃子を指して「唯今、それ、聞え

(三十)」などという言葉が、みをから散策子に向けられ、「同人したとしましたら、(二十九)」、「矢張、貴下のお姿を見ますわ。「何年ぶりか、幾月越か、フト然うらしい、肖た姿をお見受け申散策子は、岩殿寺を辞した後、みをに出会う。そこではまた、

いるということになる。

異形」的な側面が強調されることになる。

住職の語りに先駆けて客人と同じような感覚に陥っており、その定できない。「囃子の音」や「靄」を感じ取る点など、散策子はうに、客人と同じくみをに魅せられ死に近づく散策子の危険は否客人と散策子の「同人異形」性を考えれば、住職の語り口のよ

四.「霞」のある〈風景〉

危険が、ここでは鮮明に浮かびあがっていると言えるだろう。

を迎える展開にはならない。危険だけがつきまとうことになろう。しかし、作品は散策子が死危険だけがつきまとうことになろう。しかし、作品は散策子が死「靄」だけだろうか。もしそうならば、散策子には死へと向かうだが、散策子と客人の二人をつなぐものは「囃子の音」や

あった。そうして散策子は玉脇みを本人に出会う。と(同)」帰路につく。頭の中は客人とみをのことでいっぱいでまま、「独り静に歩行きながら、消化して胃の腑に落ちつけよう天窓から詰込んで、胸が膨れるまでになつた(二十四)」状態の散策子は「言はれた事、話されただけを、不残鵜呑みにして、散策子は「言はれた事、話されただけを、不残鵜呑みにして、

……助けさせたまへ(二十八)」などの散策子の様子からは、そ「魔ものの顔を見詰めて居たので(二十七)」、「南無観世音大菩薩言はぬことではない。(同)」、「遁路を見て置くのである(同)」、「我知らず肩を聳やかすと、杖をぐいと振つて、九字を切りかけ「我知らず肩を聳やかすと、杖をぐいと振つて、九字を切りかけこのとき散策子は確かに、みをに対する警戒心を持っていた。

の警戒心が窺えるし、みをを「魔もの」的なものとしてとらえて

いることが理解できるのである。

変わりはじめる。

いて話し出す。

「厭な心持」がするとみをに語る場面がある。 散策子が、のどかな「霞」のかかる〈風景〉を見ながらも、

だか厭な心持の処ですね。」

「又此の橿原と云ふんですか、山の裾がすくく〜出張つて、「又此の橿原と云ふんですか、山の裾がすくく、といい、「又此の橿原と云ふんですか、山の裾がすくく〜出張つて、「又此の橿原と云ふんですか、山の裾がすくく〜出張つて、

のね。」(三十一)

美女は身を震はして、何故か嬉しさうに、

このとき、散策子が口にした「厭な心持」の一語に、みをが

せ(同)」ながら、みをは自らも、次のように(厭な心持)につ上るやうに低く霞の立つあたり(三十一)」へ「遙かに瞳を通は散策子が「厭な心持」を感じたという場所「橿原の奥深く、蒸しとは散策子の抱く感情ではなく、みをの心持であったからである。「嬉しさう」な表情を浮かべるのは、その「厭な心持」がもとも

と思ふんですわ、声が聞えて来ましたのは、」「然うですねえ、はじめは、まあ、心持、彼の辺からだらう

何んの声です?」

(144)がしびれるやうな、骨が溶けるやうな、心持で居た時でした。がしびれるやうな、骨が溶けるやうな、心持で居た時でした。身あせつて、焦れて、つくど~口惜しくつて、情なくつて、身「はあ、私が臥りまして、枕に髪をこすりつけて、悶えて、

(三十一) 残つて居りますなら、向うの霞の中でせうと思ひますよ。 残つて居りますなら、向うの霞の中でせうと思ひますよ。がかゝつて居るやうに思はれますもの。未だ何処にか雨気ががからでせう。今でも停車場の人ごみの上へだけは、細い雨あの停車場の囃子の音に、何時か気を取られて居て、それあの停車場の囃子の音に、何時か気を取られて居て、それ

ことが挙げられよう。において、散策子は〈風景〉に対する敏感さを備えた人物であるかになってくることに先んじて何らかの不安を感じ取るという点でも、あるいはのどかさの中に潜む「地妖」にしても、後に明らこの一連の会話にある「霞」にしても、先に触れた「靄」にしての一連の会話にある「霞」にしても、先に触れた「靄」にし

さらに補足すると、散策子は散策の当初より既に、みをの周り

に

「霞」を見ていたのである。

菜種にまじる茅屋の彼方に、白波と、松吹風を右左り、其

処に旗のやうな薄霞に、しつとりと紅の染む状に桃の花を彩 つた、其の屋の棟より、高いのは一つもない。(十)

のように感じたと述べたところがある。 いる。そしてまた、住職の話中、客人もみをに「霞」がまとうか このように、みをを知る前、散策子は玉脇の家に「霞」を見て

するほど、此方を透すのに胸を動かした、顔がさ、葭簀を横 為か、いつもより眉が長く見えたと言ひます。浴衣ながら帯 にちらく〜と霞を引いたかと思ふ、是に眩くばかりになつて、 には黄金鎖を掛けて居たさうでありますが、搖れて其の音の 爾時は、総髪の銀杏返で、珊瑚の五分珠の一本差、髪の所

ある。この「霞」を見るかのような感覚が、みをに出会ったとき もう一度散策子に起こる。 この「霞」を見ることは、客人にも起こった感覚であった訳で

思はず一寸会釈をする。(十八)

束に似たるあり。紫羅傘と書いていちはちの花、字の通りだ 山の裾に靉靆く中に一張の紫大きさ月輪の如く、はた菫の花 錦の帯を解いた様な、媚めかしい草の上、雨のあとの薄霞

て膚に絡ふのを覚えた。(二十五) 散策子は一目見て、早く既に其の霞の端の、ひたく~と来 と、それ美人の持物。

「あら、お危い。」

と云ふが早いか、眩いばかり目の前へ、霞を抜けた極彩色。

と、散策子と客人との共通性が際だってくる。ただし、先に述べ このように、作品中にあらわれる「霞」をあらためて見てみる

たように、散策子はみをに魅せられ死へ向うのではなく、むしろ、

みをに共感していくのである。 みをが角兵衛獅子の少年に(ことづけ)を託したとき、散策子

がみをの気持ちを代弁する場面を見てみよう。 ふッくりした頤で、合点々々をすると見えたが、 小さく畳んで、幼い方の手に其の(ことづけ)を渡すと、 いきなり二

階家の方へ行かうとした。 使を頼まれたと思つたらしい。

「おい、其方へ行くんぢやない。」 美女は莞爾して、 と立入つたが声を懸けた。

唯心持だけなんだから……」 落したら其処でよし、失くしたら其れツ切で可んだから…… 「唯持つて行つてくれれば可いの、何処ヘッて当はないの。

「ぢや、唯持つて行きや可いのかね、奥さん、」 さうに仰向いて吃驚した風で居る幼い方の、獅子頭を背後へ と聞いて頷くのを見て、年紀上だけに心得顔で、危つかし

「こん中へ入れとくだア、奴、大事に持ツとんねえよ。」

白波に海の方、紅の母衣翩飜として、青麦の根に霞み行く。獅子が並んでお辞儀をすると、すた人へと駈け出した。後

(三十四)

ているのも、「霞」がみをと密接な関係を持っている点において、とづけ)を持った角兵衛獅子の少年があえて「霞み行く」とされているのだろう。またこのとき、みをの感情そのものである(こであった。それが間違いではなかったから、みをは「莞爾」としであった。それが間違いではなかったから、みをは「莞爾」としてあるの「おい、其方へ行くんぢやない。」という散策子の一言は、この「おい、其方へ行くんぢやない。」という散策子の一言は、

五.富士にかかる「霞」

見逃すことはできない表現である。

景〉があったのは偶然であろうか。の見える海へ出ることになる。そこに、また「霞」のかかる〈風の見える海へ出ることになる。そこに、落ち着いてもおられず富士は見失い停車場近くの自室へ帰るが、落ち着いてもおられず富士る。みをと別れた後、散策子は角兵衛獅子の緋母衣を追って一度をが角兵衛獅子の少年に(ことづけ)を託した時点で終わりであ作品の展開に即して言えば、散策子とみをの直接の交流は、み作品の展開に即して言えば、散策子とみをの直接の交流は、み

は顔をするのではないから、固より馴れた目を遮りはせぬ。秣のやうに散ばつたかじめの如き、いづれも海に対して、我すばかり。見渡す限り海の色。浜に引上げた船や、畚や、馬正面にくぎり正しい、雪白な霞を召した山の女王のましま

(三十五)

らも明らかである。この富士山の姿も、散策子と客人との密接な山。/(富士の影が渚を打つて(三十四)」というような表現かていることは、それ以前の「青麦につゞく紺青の、水平線上雪一これが、海の向こうに浮かぶ「霞」のかかる富士山の姿を言っ

(十二)目金を嵌めたやうに円い海になつて富士の山が見えますね、)目金を嵌めたやうに円い海になつて富士の山が見えますね、)(あの松原の砂地から、小松橋を渡ると、急にむかうが遠

関係性を浮かびあがらせずにはおかない。

と言はれたは、即ち、それ、玉脇の……でございます。

(+ = +

を人が小松橋でみをを見るとき、いつもこのように富士の姿が を人が小松橋でみをを見るとき、いつもこのように富士の姿が を人が小松橋でみをを見るとき、いつもこのように富士の姿が をしたが、お太鼓に結んだ、白い方が、腰帯に当つて水無月の つたが、お太鼓に結んだ、白い方が、腰帯に当つて水無月の で、現る目に、ぞッとして擦れ違ふ時、其の としたが、お大鼓に結んだ、白い方が、腰帯に当つて水無月の で、現る目に、ぞッとして擦れ違ふ時、其の としたが、として擦れ違ふ時、其の が、幽にぶるく〜と肩が搖れたやうでした、傍を通つた男の というなか というなが、として擦れ違ふ時、其の というなか というなが

気に襲はれたものでせう。(十三)

ながら、みをの心情に思いをめぐらせるのである。散策子はみをと別れた後、その「霞」のかかる富士山の姿を見

水の底を捜したら、渠がためにこがれ死をしたと言ふ、久

(三十五) 海の、水の底へも潜らうと、(ことづけ)をしたのであらう。 否、健在ならばと云ふ心で、君と其みるめおひせば四方の 能谷の庵室の客も、其処に健在であらうも知れぬ。

を持って水底での二人の再会を想像するのである。 散策子には、既に客人とみを、両者への共感がある。その共感

散策子は(ことづけ)の行方を追って、角兵衛獅子の「緋母を持って水底での二人の再会を想像するのである。

〈風景〉が視野に入ってくる。その中では、角兵衛獅子の死は衣」を追い続ける。ただし、それと同時に新たに開かれた海の

目にする現実との間に齟齬を覚えることは、既に確認しておいた。「馬鹿な奴」と笑われて深刻に受け止められず、散策子の感情が、「帰しく」と、「おり」にあります。

十月三十日)にこう記している。なお、角兵衛獅子について、鏡花は豊春宛書簡(明治三十九年

の出る筋なりからだのぐあひにて仕事がをくれ一度では完結新小説十一月分に、春昼といふのを一篇いつかの角兵衛獅子

あった。

せずつぎへ続く

みをと角兵衛獅子の遺体が打ち上げられたことを伝える作品の子の少年が重要な位置を占めていたことが窺われる。『春昼』の構想の中で、当初より時代の闇を象徴する角兵衛獅

結びを確認してみよう。

緋母衣がびつしより、其雪の腕にからんで、一人は美にして上つた時は二人であつた。顔が玉のやうな乳房にくツついて、潮に、去年の夏、庵室の客が弱れたとおなじ鳴鶴ケ岬の岩に死骸は其の日終日見当らなかつたが、翌日しらく〜あけの引

然らば、といつて、土手の下で、別れ際に、やゝ遠ざかつ艶であつた。玉脇の妻は霊魂の行方が分つたのであらう。

ば、たまる、音もせぬ。たゞ美しい骨が出る。貝の色は、日んなに潮に乱れたらう。渚の砂は、崩しても、積る、くぼめし打傾いて、黒髪の頭おもげに見送つて居た姿を忘れぬ。どて、見返つた時――其紫の深張を帯のあたりで横にして、少

打ち上げられた角兵衛獅子の少年とみをを見て、散策子だけが、の紅、渚の雪、浪の緑。(三十五)

それは、みをと出会い、彼女に共感した結果生み出されたものでしてではなく、時を違えた心中と解する散策子の感情が窺える。記憶にとどめる。ここには、客人の死をみをに魅せられた迷いとみをが確信したであろう「霊魂の行方」とともに、みをのことを

しただけのことであったかもしれない。しかし、客人と玉脇みを、た海側の領域に属する人物が、山側の自然の〈風景〉を見ようと「散策」して入り込むところからはじまる。それは新たに開かれ『春昼』『春昼後刻』は、散策子が山側の領域へ「ぶら〳〵」と

てこれまでは何ら問題視されなかった海側の新開の〈風景〉 この二人の話を聞かされ、みを本人に出会う間に、散策子にとっ つしか受け入れがたいものになる。 はい

子が客人とみをとに共感していく様子が見えてきたように思われ 散策子の見た「靄」や「霞」のある〈風景〉を追うことで、散策 り方に対する懐疑のはじまりでもあった。散策子はそのように ろう。散策子の「地妖」の発見は、自らの属する新開の領域のあ 〈風景〉に対する敏感さを持ち合わせる人物であった。さらには、 角兵衛獅子が象徴する時代の闇の存在に注目しておくべきであ

みをの再会を想像し、時を違えた二人の入水による心中を思い描 な散策子の感情の動きを巧みに表出したものであったのである。 方」への確信にまで繋がる。「霞」のある〈風景〉は、そのよう く。それは二人への共感がさせたことであり、結末での「魂の行 散策子は、「霞」のかかる富士の姿を見ながら水底での客人と

- 6 (7) に同じ。
- 8 7 野口武彦「想像力の言語空間」(『小説の日本語』/『日本語の 葉』/おうふう/平成十三年一月) 山田有策「「春昼」「春昼後刻」の構造」(『深層の近代 鏡花と
- 9 世界』13/中央公論社/昭和五十五年十二月) 東郷克美「散策・地妖・音風景——「春昼」に夢の契はあった
- 〔鏡花作品・書簡の引用は、『鏡花全集』(岩波書店/昭和四十八年十 . 月~)に拠った。すべての引用について漢字は適宜通行の字体にあ か――」(「国語と国文学」/至文堂/平成十二年二月)

らためた。傍線はすべて論者の附したものである。〕

- 昭和六十二年十一月)

高桑法子「『春昼』『春昼後刻』論」(『論集泉鏡花』/有精堂/

『明治文学全集』66(筑摩書房/昭和四十九年八月) 『漱石全集』第九巻(岩波書店/平成十四年十二月)

2 1

(3

5 4 『明治文学全集』30 『漱石全集』第十二巻(岩波書店/平成十五年三月) (筑摩書房/昭和四十七年五月)

47